series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

## 第五章

## Porta Aurea

峯村　明

# リ・コンストラクション


登場人物
5・Porta Aurea
102.
103.
104.
105.
106.
107.　Genesis
あとがき
奥付

**登場人物**

| | |
|---|---|
| 桧山 健 | 21歳の大学生 |
| レル・ヴァリス | 16歳の医学生 |
| マックス・ペイリー | 古生物学を専攻している大学生　25歳 |

# 5・Porta Aurea

## 102.

サンパウロから大西洋の上を飛び、ローマを経由してポータウレアまで空路でほぼ十三時間。意外と近い。レルは目的地に近づくにつれ寡黙になっていった。こいつでも緊張するのかと、健が感心したくらいだ。それほどふだんのレル・ヴァリスは天真爛漫で、できないことや不得手なことなどなにもないやつだと思わせるのに、それが"仕事"となると人が変わったようになってしまうのだった。

フライト中ろくに言葉を交わすこともできず、ポータウレアの空港に着くと、教授の秘書がそわそわとレルを待ち構えていて、すぐさまふたりを車に押し込んだ。車内では秘書とレルの間でドイツ語の専門用語が慌ただしく飛び交い、雰囲気からしてどうやら切羽詰まった状況のようだ。
車は二十分ほど走って病院に到着する。沿道を観察する余裕もなかった。レルと秘書は駐車場からあっという間に院内に入って行ってしまい、健はひとり車に取り残された。

蚊帳の外にもほどがあるというものだ。

ホテルもとってなければ、車にはレルのと自分のと荷物が積みっぱなしだ。レルは身ひとつで行ってしまったのだ。どうしろっていうんだ。呆然とするやら腹が立ってくるやら、後部座席でひとりぽつねんとしていると。
運転手が外からドアを開けた。そして、「ご案内します」、と言った。車外にはいつの間にか、運転手と同じ制服制帽の男がいて車のトランクからふたりぶんの荷物を取り出している。運転手に、ついてくるよう促され、健は病院内に入った。

わけがわからないが、レルはなにも持たずに——携帯電話は健に押し付けていった——行ってしまったし、連絡の取りようもない。とりあえず、同じ建物にいればそのうちなんとかなるだろうと考えることにする。

運転手は病院内を少し歩き、いったん外に出て、別棟に向かう。少し灰色がかった石灰岩の外壁を見て、ペイリーはどうしているだろうかと考え、苦笑する。友人のひとりはブラジルで翼竜に、もうひとりはポータウレアというヨーロッパの片隅で手術に没頭しようとしている。

さて、健、おまえはなんなんだ？

## 103.

「しばらくの間、こちらでお過ごしください」と、運転手は言った。案内された部屋は建物の三階で、スイートルームのように広くて豪華だった。病院の施設ではなく、ふつうにホテルなのかもしれない。見回せば浴室からトイレット、キッチン、冷蔵庫まであって、何日でも快適に過ごせそうだ。

「しばらくの間というと？　どれくらい？」と尋ねてみる。
運転手は穏やかに応じる。「さて。お連れ様のご用が済むまで、ということなろうかと」

レルのおしごとが済むまでここにいろということらしい。勝手についてきた以上、文句を言う筋合いはないのだけれども。
「お退屈でございましょうな」と運転手。

「いや。そんなことは」ある。なにしろすることがない。

「もしよろしければ、市内観光など、いかがでございましょう」

「外へ出てかまわないのか？」

「……もちろんでございます」

なんとなく……あまり突っ込まないでもらいたい、という雰囲気を、健は感じ取った。この超豪華なスイートルームといい、制服制帽の運転手といい、なにか訳がありそうだった。まあ、どんな事情があるにせよ、健にはなんの関係もないことだった。

ひと眠りしようかとも思ったが、室内の時計をみれば、午前11時をまわったところ。昼間の市内観光もわるくないかもしれない。

運転手は観光ガイドをつけてくれた。駐車場から部屋まで荷物を運んでくれた男。「パウジーニとお呼びください」彼はにこにことそういった。
「イタリアン？」
「Si」

## 104.

運転手も、パウジーニも、健に名前を尋ねなかった。彼らにとって健はレル・ヴァリスにくっついてきただけの存在なのだ。それはそれで、気楽でいい、と健は思った。

陽気なイタリアン、パウジーニは私服に着替えていて、街のおしゃれなレストランへ案内してくれ、いっしょにランチにつきあってくれた。予約もなしに入った店だったが、ラフなフルコース、といった感じのメニューは珍しい魚介が多く、野菜も果物も新鮮だった。オリーブオイルがおどろくほど美味。魚介によく合う白ワインはシチリア産だという。昼のワインはまた格別である。

肝心のレル・ヴァリスは仕事中なわけだからなんとなく後ろめたいところがまたいい。背徳感というやつである。支払いはこちらもちですから遠慮なくどうぞ、と勧められるままだ。
そういえば、"ホテル"代はどうなってるんだろう。まあ。いい。なるようになれ。
せいぜい地元の食材を楽しみ、本場のイタリアワインをご馳走にあずかり……アデレードヒルズのワイナリーオーナーにはかなり上等なものに思われた……、坂の多い、白い石造りの街並みとアドリア海の夢のような青を目に納めておこう。

マックス・ペイリーが夢中になっている頭でっかちのあの翼竜は、こんなところまで飛んできたのだろうか。当時は大西洋はなく、ブラジルの東海岸とアフリカの西海岸はくっついていたというから、それも夢ではないはずだ。もっとも、二頭身とも三頭身ともいえるマンガのようなあの体で空を飛べたとは、ちょっと考えづらいんだが。

（……翼竜、か）
ペイリーが翼竜好きとは知らなかった。いつも違う話で盛り上がっていたから。
（翼竜……）

紺碧の海と空のはざまを滑空する白い翼。鋭く前方に突き出した口ばしと真っ赤な目。

この時代のではない生き物なのに、なぜかそんなイメージがありありと彼の目に映った。

青いアドリア海を飛ぶ白い海鳥を目にしたからか。

（――ちがう――）

彼はその異形の翼あるものを上から見下ろしていた。翼竜は彼を見上げていた。彼が誘導したからだ。名前をつけ、導いた。

ついてこい、と。

（オレが――名づけた――）

夕凪の海を風が渡る。夢のように美しい光景の中、魂が体を離れていくような心地がする。

ここ数日。なにかおかしい。なにかが起こっていると、健は感じる。自分の身になにかが起こっている。その直感に、ぞくりと鳥肌が立つ。

「ああ、見て！　素晴らしい夕陽ですよ！！」
パウジーニが感に堪えないという身振りで叫んだ。たしかに叫びたくなるような見事な夕陽。
「ほんとうに！　美しいところです。ポルタアウレアは！　私は母国の次に大好きです！！」

「ポルタアウレア？」健はふと聞きとがめた。ポータウレアではなく、ポルタアウレアだったのか――
「パウジーニさん、ポルタアウレア、とはどういう意味ですか」

「ん？」とパウジーニはいっしゅん現実に引き戻されたような顔をした。そして、
「ああ。ポルタアウレア。ポルタは門、アウレアは黄金。ラテン語ですよ」

「黄金の門？」

「Si」

　少しばかりのワインで酔ったりしないという自信はあった。けれども飛行機の長旅が続いて、今日が何月何日何曜日なのかよくわからない。疲れもたまっていたのかもしれない。それで、アルコールのせいかもしれないと思った。頭の中にもやがかかったように、見渡せるべきものが見えない、そんなもどかしさを感じる。なにか大事なものの前で、もやが渦巻いていた。

## 105.

　深夜、携帯電話が鳴って、目が覚めた。パウジーニからだ。そろそろ時間です、という。こんな真夜中になんの時間だ？　まだもやが頭の中をぐるぐると——
　はたと気づいた。レル・ヴァリス！　彼の仕事が終わったのか！

　着替えて部屋を出ると、廊下の向こうでパウジーニが待っていた。
　彼についていくと、大きな部屋に通された。立派なソファとテーブル、それと飾り棚だけの部屋。そこに男がひとり。まだ若い男…三十代くらいか…で、長身のしっかりした体つきに、肩までの黒髪。ウェーブと上品な縦ロールはどうやら天然ものだ。こういう髪型は顔面が狭く、奥行きのある頭の形でないと似合わない。彼の場合端正な面によく似合っている。目をあげると、壁の柔らかな照明のなか、緑色の瞳だとわかった。

　パウジーニは軽く礼をし、部屋には入らなかった。

　長身の男は、健に声をかけてきた。「貴殿は、ドクターの関係者だとか」
「ええ、まあ」
「急なことだったが無事、終わったようだ。礼をいわせていただこう」

　どことなく、男には尊大な印象があったが、声は感じのいい低音で、よく響いた。予想もしなかったていねいな言い回しと相手の態度に、健は少し鼻白み、どういたしまして、と言っておいた。そして聴かずにいられなかった。「失礼ですが、あなたは？」

男は言った。「患者の家族だ」

そんなやりとりをしているところへ、ドアがノックされ、外から開いた。パウジーニだった。「面会ができるようです」

男はうなずき、部屋を出て行く。健も続いて廊下へでると、廊下の向こうから医師団らしい一行がやってくる。男は立ち止まって医師団と話し始め、レルも短く挨拶してから健を見つけて走ってきた。うれしそうに。

「ごめん！　待たせちゃった！」
「いや。おつかれ。長い時間の仕事だったな」
「うん、ちょっとね。けど、無事に終わってよかった！　それだけは代え難いよ」
「すこし、眠れ。疲れただろ」
「ん。今、何時？　シャワー浴びたい。朝ごはんはたくさん食べられそうだよ」

## 106.

「し、心臓手術！？」
「うん」
「それで急いでたってことか！　おまえ外科医志望だったのか！」
「うん、まあ」
レルは何でもないように受け答え、熱心に朝ごはんを食べ、オレンジジュースをお替りし、水のように飲んでいる。

恐れ入りました、と這いつくばりたいと言ったのはペイリーだが、文句なく同感だと健は思う。この若さで心臓手術のアシスタントとは。

緑の観葉植物が揺れる食堂で、にこにこと朝食をサービスしてくれるのはパウジーニだ。いったいどういう立場でどういう仕事をしているのか気にはなるが、こちらの名前を聴かれていないし、気にしても意味はなさそうだ。

　レルが仕上げのカフェオレを飲んでいるところへ、彼の教授がやってきた。パウジーニがさっそくコーヒーを運んでくる。

　レルと教授は昨夜の労を互いに労いあった。傍からみていると教授と生徒ではなく、同等の関係のようにみえるなと健は感じている。気のせいかもしれないが。

「さてレル・ヴァリス。考えたんだが、きみはまだ夏休み中だろう？　今回のご褒美に、休みを延長するというのはどうだね」

「え。延長って、どれくらい？」

「一か月でどうだ。やりたいことはいろいろあるだろう」

　健はコーヒーを吹きそうになった。一カ月の？　夏休み延長――？

「あります。あります教授。ボクは旅行したいんです。ここまで来たからには、シリア、イラク、イラン、アフガニスタン、それに――イスラエル――」

　聴いてると危なっかしいとこばっかりじゃないか？？　しかし教授はうんうんとうなずいている。初耳ではないらしい。以前からこういう話をしているようなのだ。しかしレルは厭々をするように頭を振った。

「けど！　悲しいかな、お金がない！　バイトは禁止されてるし、旅行したいっていう理由でうちの親が出してくれるとは思えない！！」

　いつだったか、レルにはアクティヴな何かが向いてるとペイリーが言っていなかったか。その時はぴんと来なかったが――健は衝動的に教授とレルの会話に割り込んでいた。

「おまえ、何がしたいんだ？」

　レルの答えはシンプルで、迷いがなかった。
「政情が不安定な地域の、医療現場をこの目で見たいんだよ」

## 107. Genesis

みなさんは剣と魔法が人々を支配していた世界を知っています。
その世界が、今とはまったく異なる地理と歴史の上にあった、ということもご存知です。
抽象的な要素が複雑に絡み合うこの現代世界よりも、よりシンプルで荒々しい力によって成り立っていたそこでは、私たちは空、海、地、それぞれの自然ときわめて緊密に結びついていました。私たちはそれらの一部であることを謙虚さをもって知っていましたし、元素の精霊たちは私たちに力を貸しあたえるべく、私たちの言葉に耳を傾けた、そんな世界でありました。

私たちは言葉によって火を熾し、風を呼び、雨を降らせることができ、それらの駆使が許されていた、思えばおとぎ話のような世界です。ですが、私たちには、ひじょうな郷愁の念をもってその世界を思い起こす、そうすることでしか、あの世界と関わることはできません。
時間と空間のかなたに在るならば、なんとかしてそれを克服する方法を模索しもしましょう。しかしそれは不可能です。あの世界は永久に失われました。
私たちにできるのは、前に進むこと、ただそれだけなのです。

ブレシット　バラ　エロヒム　エト　ハシャマイム　ヴェット　ハアレツ[1]

この魔法の呪文のような言葉を、みなさんの心の中に浮かべてごらんなさい。
みなさんが感じるものを、言葉にする必要はありません。いえ、できないのではないでしょうか。この呪文のようなものは、人の言葉が生まれるよりも前から存在していました。言ってみれば原言語です。

この呪文の中で、宇宙規模の、筆舌にし難い力のひしめき合いのさなかで翻弄されながら、元素の精霊たちが私たちをじっと見ています。彼らの関心はただひとつ、私たち人間なのです。人間の魂の行方を、彼らは非常な関心をもってみているのです。彼らが提供することに決めた人間の肉体がどこへ行き、なにをするのか、彼らにはたいへん興味深いのです。いえ興味深かった、のです。いつしか彼らは人間に関心を失くしてしまいました。

もはや私たちの言葉は彼らに届きません。私たちは精霊の恩恵をも失ったのです。それがこの現代世界です。

---

[1] 「原初に、神々は天と地を創造した」という意のヘブライ語

『創世記の秘密』より
ルドルフ・シュタイナー・著　西川隆範・訳
水声社

今、私がみなさんにお話する機会を与えられたこと、みなさんにめぐり合えたこと、これは偶然でしょうか。
偶然とは、事物と事物、人と人との関係を無機的にする言葉であると私は考えます。この世におこることすべては、必然であると私は考えます。
そうであるからこそ、この場にいてしかるべきである、それなのにいない人たちの存在は、なんらかの必然であるのです。

Ｈ＆Ｌの、〝Ｈ〟のイニシャルを持つ者、彼は今はここにいません。しかし彼が私たちの列に加わり、私たちの先頭に立つ日がやってくることに間違いはありません。

『己の魂の声に忠実に生きる者たちのために』

そのために我々ファウンデーションは存在します。彼が今ファウンデーションのこの根幹理念を生きようとする途上にあることを、私は信じて疑いません。彼に限らず、我々はみなそうせずにはいられないのです。

なんとなれば、魂の声とは血を滾らせる情熱と衝動であり、それはとりもなおさず、我々の肉体とこの世界に素材を提供した元素の精霊たちをも生み出したもの、原初の熱と同じものなのですから。

Dr.Albert von Laurens Ⅲ
Foundation　Ｈ＆Ｌ
Hauptsitz in Brussel　年次総会における講演より

５・「Porta Aurea」

第二部へ続く

## あとがき

ここまでが第一部。
さて、今回手術を受けた人、その家族だという人、ポルタアウレアなる国。どれもいましばらく伏せておきたいので、登場人物紹介に載せられないし、あとがきで色々語れません…うずうず…
でもパウジーニさんは載せていいかな。でもいまのところナゾの人だしなあ…やっぱりやめておこう。
あとがきにもなんにもなってやしない。

第六章から第二部となります。一段落ついたところでまた、まとめて公開しますのでしばらく間があくかもです。
というわけで。長い冬がようやく明けそうな午後。

Stammi bene.

2025年3月10日　記

奥付

リ・コンストラクション　　第五章　Porta Aurea

2025年　3月12日初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　　写真AC

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社